

昨今の異常気象を考える  
～ I P C C の報告から見る気候変動の実態と予測～

日 時：平成19年7月20日（金）13:30～15:30

場 所：新潟市中央公民館「クロスパル」・映像ホール（新潟市）

ゲスト：高田政幸氏（新潟地方気象台・次長）

谷中隆明氏（新潟県地球温暖化防止活動推進センター長）

ホスト：鈴木聖二氏（新潟日報社 編集委員）

（司 会）

皆様、大変お待たせいたしました。ただ今より、「われら信濃川を愛する～信濃川自由大学」を開校いたします。

本日はお忙しい中ご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

私、本日の司会・進行を務めさせていただきます坂井英里子と申します。どうぞよろしくお願いたします。

さて、信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史などその魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、毎回、信濃川にゆかりのあるゲストの方々からさまざまなお話をお聞きしております。今回のテーマは「気象」を取り上げ、その後「利水」、「治水」となっております。今後も是非ご参加いただきたいと思います。

なお、今後のスケジュールおよび過去の講座に関しましては、信濃川自由大学のウェブページで議事録を公開しています。お手元の資料にアドレスが記載してございますので、そちらからご覧ください。

それでは、第2回講座に移らせていただきます。今回の講座テーマは「昨今の異常気象を考える～ I P C C の報告から見る気候変動の実態と予測～」です。

本日はゲストスピーカーに、新潟地方気象台次長の高田政幸さん、財団法人新潟県環境保全事業団・新潟県地球温暖化防止活動推進センター長の谷中隆明さんをお迎えしています。ホストは鈴木聖二新潟日報社編集委員が務めます。

まず、お三方のプロフィールをご紹介します。

はじめに、新潟地方気象台次長・高田政幸様をご紹介します。高田次長は静岡市清水

区出身。昭和50年に気象大学校をご卒業。その年に気象庁に入庁され、昭和50年から昭和54年までは静岡地方気象台技術課に勤務されました。昭和54年から平成4年までは気象庁本庁海洋気象部、海上気象課にて技術専門官と主任技術専門官を、平成4年から平成6年まで気象衛星センターデータ処理部解析課にて調査官、平成6年から平成8年まで気象庁本庁海洋気象部海上気象課にて調査官、平成8年から平成10年まで気象庁本庁気候・海洋気象部海上気象課にて調査官、平成10年から平成13年まで気象庁本庁気候・海洋気象部海務課にて調査官、平成13年から平成17年まで気象庁本庁気候・海洋気象部海洋気象情報室にて課長補佐、平成17年から現在まで新潟地方気象台次長としてご活躍されています。

高田次長の主な取組み、関わりは、沿岸波浪数値予測モデルの研究開発とシステム化、気象衛星「ひまわり」5号のデータ解析処理の設計、流出油の漂流予測システムの整備、海洋気象観測船「啓風丸」の代替船建造、地球温暖化に伴う海面上昇監視体制の整備、海洋（波浪、潮位、海水温、海流、海水など）の情報提供体制の整備、高度化を行っています。

続いて、財団法人新潟県環境保全事業団、新潟県地球温暖化防止活動推進センター長・谷中隆明様をご紹介します。谷中センター長は昭和21年11月北海道でお生まれになり、昭和44年3月北海道大学工学部衛生工学科をご卒業されました。昭和47年4月新潟県庁に入庁され、こちらでは大気汚染、騒音振動、地盤沈下などの調査研究、東アジア酸性雨モニタリングネットワークの立ち上げ、原子力安全行政などに取り組みました。平成18年3月新潟県原子力安全対策課長を最後に新潟県をご退職され、現在、財団法人新潟県環境保全事業団で新潟県地球温暖化防止活動推進センターのセンター長としてご活躍されています。

最後に鈴木聖二編集委員をご紹介します。鈴木編集委員は石川県金沢市出身。昭和51年新潟日報社にご入社され、本社報道部の経済、県政、新潟市政記者クラブや長岡、東京支社などで取材記者、報道部デスクなどを経て、現在は編集委員としてご活躍されています。

それでは、高田次長、谷中センター長、鈴木編集委員をお迎えいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。

それでは、ここからの進行は鈴木編集委員にお願いいたします。どうぞよろしくお願いたします。

(鈴木)

新潟日報の鈴木です。よろしくお願いいたします。今日は大勢の方に足を運んでいただきありがとうございます。

今日は昨今の異常気象を考えるとというタイトルになっているのですが、大気が異常というよりも、つい4日前に大地の異常に見舞われまして、皆さんもそれぞれ対応等でお忙しかつたと思います。わずか3年をおいての大地震ですけれども、プレートテクトニクスと

いか、大地の揺らぎ、地震も、今日話題にする異常気象も大きな意味でいけば地球全体のメカニズムの表れというところで共通するところもあるのかと。とはいいながら、地震というのは私たちは抗うことができない、予知することすらかなり難しいという自然現象ですけれども、昨今、非常に問題となっている地球の温暖化、地球環境の問題というのは、言ってみれば地球生命の頂点に立っている我々人間自身が起こしたものです。地震というのは、たとえ被害が大きいたとしても局地的、その地域周辺だけの被害にとどまるものですが、地球環境とりわけ温暖化の問題というのは全世界に及ばざるを得ない。

そういった意味で、私たち一人ひとりが例外なく被害者であり加害者である。そういった視点で今日は取り上げていきたいと。それこそ世界中の人たちがサミットでも最大のテーマとして取り上げているわけです。「地球」という言葉が付くと遠いところで起きている、遠いところで誰かが作り出しているものだという印象もあるのですが、そうではないと。新潟で暮らしている私たち一人ひとりがかかわる問題です。

この講座全体は「信濃川」という川を考えていこうという講座ですが、信濃川が作り出した自然だとか、地域社会だとか、産業などすべてにもおそらく影響を与えざるを得ない問題が今日テーマになっている異常気象、地球温暖化の問題だと思っています。そういう意味で今日のテーマが設定されましたし、今日の話もそういう視点から進めていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

まず、新潟地方気象台の高田さんにお話を伺いたいと思うのですが、今回のニュースでも皆さんお気づきになったと思いますけれども、気象庁というのは「気象」という名前が付いていますけれども天然現象を相手にしていて、地震というものも気象庁の管轄になっています。高田さん自身、地震発生後非常にお忙しくしていらっしゃるということで、本題に入る前に、もし、今回の震災のことで印象とかお話しになられることがあれば一言いただければと思います。先ほど、新しい予測システムが今回初めて稼働したというお話もされてきましたので。

(高 田)

新潟地方気象台次長の高田と申します。今日はよろしくお願いいたします。

ご存じのように、4日前に大きな地震があつて、新潟市も震度5から、東区で震度3、中央区は震度4という、かなり強い揺れがありました。また、この10月1日から、気象庁は緊急地震速報という新しい情報を発表することになっていますので、今日は急遽受付でパンフレットを配付させていただきました。パンフレットには「この秋スタート」と書いてありますが、6月の中央防災会議で10月1日ということが一応決まりましたので、その日からNHKなどテレビで一般への提供が始まるということで進んでおります。

では、今日の午前中に気象庁が報道発表しました中越沖地震の報道発表資料を持ってきましたのでご覧になっていただきたいと思います。

図-1が今回の地震の震源域の図です。オレンジで大きな丸が7月16日の10時13分の本震です。その日の午後には最大余震がありました。これは15時37分で、緑でちょうど海岸線にかかっていると思いますけれども、そのあたりが震源になっています。最初の本震では震度6強を柏崎、刈羽村、長岡市、長野県の一部で観測しました。震度6弱が上越市、小千谷市。新潟市は西蒲区が5弱、中央区が4ということでした(図-1)。

図-2がその後の余震の状況です。これは今日の9時までに震度1以上の有感地震が毎時何回あったかというグラフです。その後は大分少なくなっています。累計で今朝9時までで有感地震が107回ということです(図-2)。

これをほかの大きな地震の余震の推移と比べてみます。一番下の赤い太いグラフが今回の中越沖地震の余震の発生累計数です。横軸に地震発生からの日数をとってあります。今日で大体4日目のところまで到達しています。この水色のグラフが3年前の中越地震の余震の発生状況です。それに比べると今回の地震の余震というのはかなり少ないと見ております(図-3)。

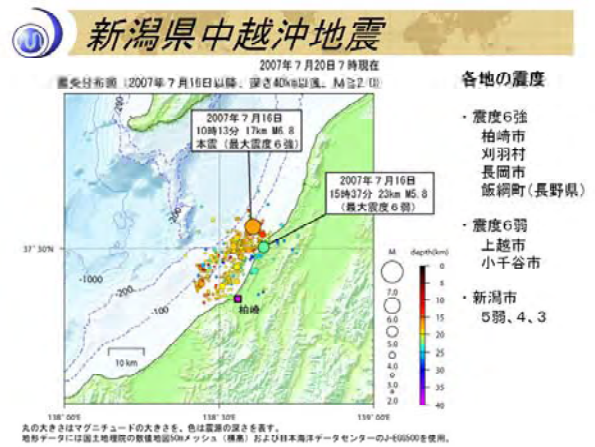


図-1

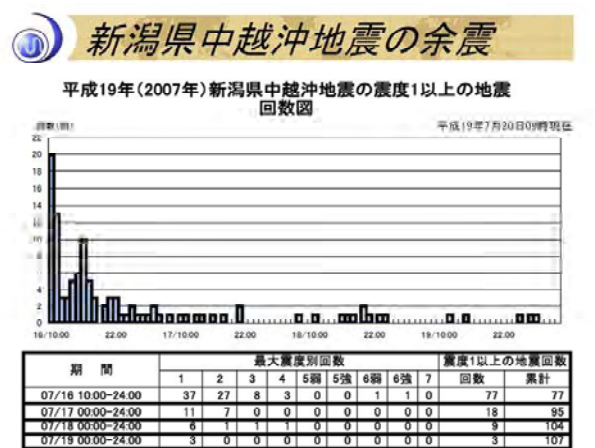


図-2

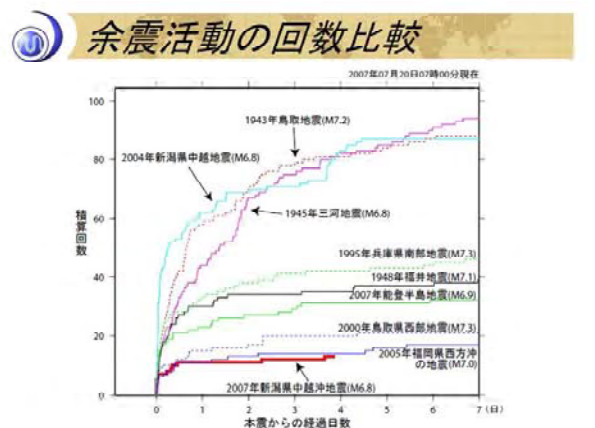


図-3

先ほどパンフレットの話をしましたけれども、緊急地震速報というものを始めます。震源の近くに設置してある地震計でとらえた初期微動をキャッチして、素早く情報に仕立てて、報道機関などから発表するというものです（図-4）。

これが今回の本震で緊急地震速報がどれくらいの時間的猶予を持って伝えられたかという図です。地震が発生して初期微動が来て大きな揺れが来るまでに発表する情報ですので、当然、その時間差というのはわずかです。でも、大きな揺れが来るという情報が入れば、自分の生命を守る行動をとることはできるのではないかと思います。それは普段から構えて、いろいろと頭の中で考えていないといけないのですけれども、今回の場合ですと、一番内側の円の震源に近いところだとこの緊急地震速報は当然間に合いません。しかし

その外側に、5秒、10秒、15秒、20秒と円が描いてありますように例えば、新潟市ですと5秒から10秒くらいの猶予時間があり、場合によっては間に合うということです。

色が付いているのは震度です。オレンジは6弱、赤い所が6強くらいです。新潟市ですと5弱から4くらいの色が付いていますけれども、わりと揺れの強い所で5秒から15秒くらいのところでは有効に使えると思います。このような情報を10月1日から出しますが、これを聞いてどう行動したらいいかという注意事項もあります。それはパンフレットに書いてありますので、帰られてからよくご覧になっておいてください（図-5）。

（鈴木）

ありがとうございました。5秒で何をするかというのはかなり難しいですけれども、私は先日長岡で地域FMを聴いていましたら、一部試験的に使っているんです。そうすると、先ほどの余震については何秒前にとというのは放送されていましたが、有効に働いて、これがいい経験になればと思っています。

では、本題に頭を戻します。どうも温暖化というと、私たちの実感として最近非常に気象が荒々しいなというか、極端な気象が、先日も台風が四国・九州を襲ったばかりですけれど



図-4

### 新潟県中越沖地震(7月16日)

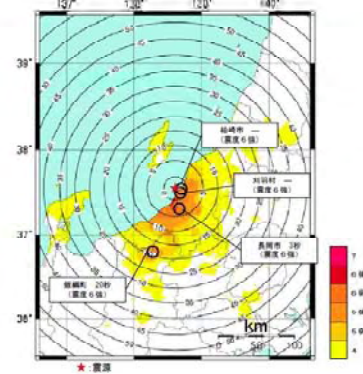


図-5